

イエス弟子たちに現れる

ヨハネ 20 章 19-23 節

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

物事にはいい面と悪い面の両面があります。すべてにまったく良いという事はそうあるものではありません。それは神に属する事柄です。人がやることには、どうしても良い面、悪い面がつきまといます。

さて、イエスの死はただの死ではなく、栄光を表すものでした。イエスの十字架以降の出来事は①弟子たちに現れる（復活）②聖霊を贈るの二つまとめられることもできます。いま朗読したテキストはこの出来事を端的に記しています。

マクダラのマリアがイエスの墓に翌日にいけなかったのは過越祭の安息日だったからです。ところで過越祭とはどのような祭りでしょうか。出エジプトに関連しています。エジプト脱出にあたりモーセとファラオの争いの中で、ユダヤ人は自分の家の門に羊の血を塗って災い（初子殺し）を過ぎ越す、自分たちも神の手にかかってしまわないように目印をつけた。モーセはこの混

乱に乗じて民をひきいてエジプトを脱出します。そのときに種なしパン、パン種をいれなくて焼いたパンを食べた、という故事にゆらいする祭りです。一方、ペンテコステとはユダヤ教の七週の祭りのキリスト教での呼び方です。

七週の祭り（シャブオット）とは、ユダヤ教の祝祭で、過越、仮庵の祭とともに三巡礼祭の一つ。太陽暦で5月または6月に行われる。過越の第2日の49日（7週間）後に始まる約3日間の祭。出エジプトの49日後にシナイ山で神が律法を与えたことを記念し、また春の収穫を感謝する農業祭としての意味もある。日常の仕事が禁じられる安息日であり、トーラーの学習、ルツ記の朗読などが行われる。食事には肉を使わず乳製品を食べる。キリスト教では、シャブオットの日に聖霊が降ったとされることから、同時期にペンテコステ（ギリシャ語で50日の意で、シャブオットの訳語）として祝う。（ウィキペディアより）

七週の祭りはレビ記にこう規定されています。

あなたたちはこの安息日（過越祭）の翌日、すなわち、初穂を携え奉納物とする日から数え始め、満七週間を経る。七週間を経た翌日まで、五十日を数えたならば、主に新穀の献げ物をささげる。各自の家から、十分の二エファの上等の小麦粉に酵母を入れて焼いたパン二個を携えて、奉納物とする。これは主にささげる初物である。（レビ記 23:15-17）

過越祭では、大麦を初穂として神にささげ、しかも「種の入らないパン」を七日間食べますが、七週の祭りでは、主への初穂として新しい小麦粉にパン種を入れて焼いたパンを二個ささげます。なぜ、パン種が入ったものなのでしょう。また、なぜ、それで作ったパンを二個なのでしょう。ここに隠された神の秘密がありそうです。

ひとつの解釈ですが、二個のパンは「ユダヤ人」と「異邦人」を意味しています。この二つのパンが、罪を象徴する「パン種」を入れたものをささげるということは、罪のあるままで祭司を通して神に近づくことを意味しています。

七週の祭りにはルツ記を読む慣習があります。きょうも信仰的なユダヤ教徒は会堂で、自宅で読んでいることでしょう。ルツはボアズと再婚してイエス

の先祖として福音書に記されます。わたしたちはルツがモアブの女性だったということをおもひ出します。

サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。(マタイ 1:5-6)

ユダヤ人は七週(ペンテコステ)の祭りを行ないながらも、いにしえに定められた二個のパンの意味がわからなくなっていたのでしよう。同じように、この意味を聖霊に満たされたユダヤ人の弟子たちがすぐに悟り得たかといえはそうではありません。この神秘が明確に啓示されたのはパウロが最初でした。

私たちは、使徒 1 章 8 節でイエスが語られた「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。・ ・ ・そしてわたしの証人となります」というみことばを、宣教面から「力を受ける」ということにどうしても思いが行ってしまいがちです。そのため、「五旬節(七週(ペンテコステ)の祭り)に」聖霊が注がれることによって、その祭りの真意が成就したということになかなか思いが行き届きません。二個の種ありパンを神にささげるという祭りの行為の意味、ユダヤ人もそれ以外の民も、つまりすべての人が罪のあるままで神の御許に近づくことができる。それがイエスの十字架の死、聖霊によって成し遂げられた神の真意です。

さて、きょうのテキストはヨハネ福音書です。復活節第 2 主日で読んだ箇所なので聞き覚えのあることかと思ひます。そのときに別名ヨハネのペンテコステといわれていることを紹介しました。ルカは七週(ペンテコステ)の祭りの日に聖霊降臨があったとしますが、ヨハネは過越(ペンテコステ)の主日(ユダヤ教なので土曜日)の次の日に弟子たちに聖霊を復活イエスが注いだ、吹きかけたと記しています。聖書には矛盾した記述がしばしばでてきます。聖霊降臨はいったいどっちなのか、ヨハネでは過越(ペンテコステ)の日曜日、ルカではその 50 日後の七週(ペンテコステ)の祭りです。こんなときは、理屈をあれこれ考えるよりどちらもおまかせと信じてそのうち

わかってくるようです。（こういうときにマリアさまに訊くことができるカトリックがうらやましい）

教会の生まれた日、誕生日だとか、使徒言行録二章のような教会を目指そうとか etc…ペンテコステを祝うことは結構なことです。しかしレビ記に記されているように過越祭から 50 日目に律法が賦与されたことを記念して、この七週の祭りは定められました。聖霊が降ったからペンテコステの祝日があることに間違いはないのですが、その元に七週の祭りがあり、その祭りは神が定めた祭りでした。

さいごにきょうのみことばで終わります。

「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」
